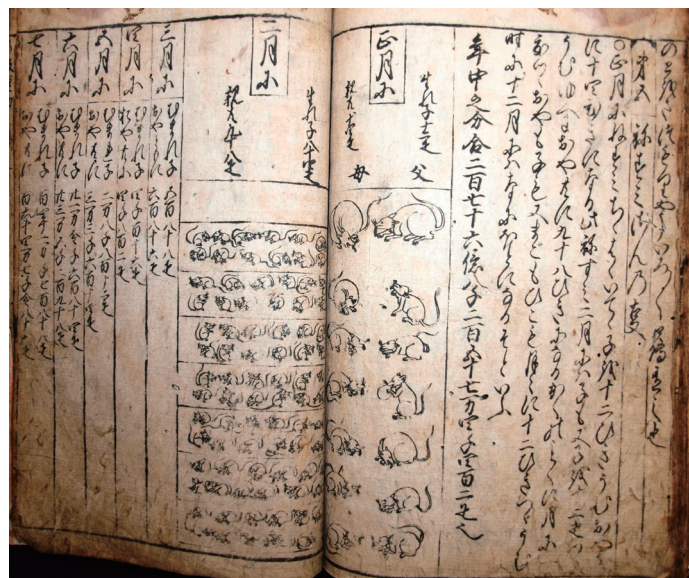


塵劫記（算術の普及）



* 県庁伝来旧藩記録775「塵劫記(木版)」

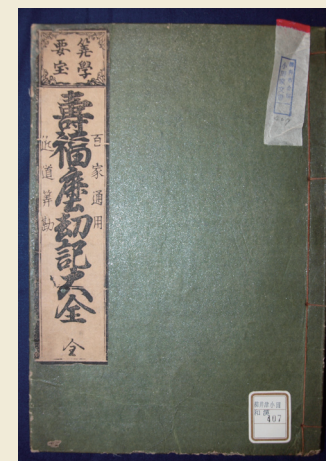
解説

元禄時代には自然科学の発達が見られました。数学の分野では関孝和（せきたかかず）が出て和算を発達させ、また吉田光由（よしだみつよし）は「塵劫記（じんこうき）」を著し、算術を庶民に広めました。

塵劫記には、数の数え方から始まって、九九、算盤の使い方、図形の面積の求め方など多くの例題が収められています。豊富なイラストと分かりやすい文章で書かれており、以後、長い間算術の入門書として広く用いられました。

九九の表では「 $2 \cdot 3$ が6」に対する「 $3 \cdot 2$ が6」のような入れ替えないなど、現在私たちが親しんでいるものとは少し異なっています。

写真は、左が塵劫記の例題として著名な鼠算、右は屋敷の周りに堀を掘って盛り土をした時の高さを求める問題の部分です。



* 算術の入門書として親しまれた塵劫記には、数多くの類本が作成されました。写真は「寿福塵劫記」で1797（寛政9）年に刊行されたものです（小田家（金屋）文書と漢407）。